

【矢島好高君追悼特集】

永遠の夢追い人、矢島好高君逝去

昨年来、病と闘っていた矢島好高君（7組）が、ついに力尽き亡くなった。

訃報に接した時、仲間たちは驚きと哀しみで声も出ない状態であった。

正月元旦、川越の病院で息を引き取った矢島君の亡きがらは故郷上田に運ばれ、8日通夜、11日告別式が挙行された。上田法事センターでの告別式には700名を超える多くの人たちが焼香の列を作り、参列した40名近い同期も永遠の別れを惜しんだ。

以下、同期3人の追悼の言葉を掲げる。

羽田義久君（11組）は同期としてだけでなく親戚（矢島君の義兄）としても、早過ぎる旅立ちを悔やんでいる。

若林健君（9組）は葬儀委員長として式の全てを取り仕切ってくれた。

小山田秀士君（7組）はクラスを代表して思いを寄せてくれた。

さらに、65期HPアーカイブスから、2010年3月17日付けで寄稿された矢島君の

エッセイ(http://uedahs65.web.fc2.com/yajima_shin100226.pdf)も改めて一読いただきたい。 また、最終頁に写真を掲載しました。

（15年1月24日、上原昇（2組））



矢島好高君追悼文

若林 健（9組）

私は故矢島好高君とは梅花幼稚園・中央小学校と同級生であり、以来中高と同じ門をめぐり卒業後は同じ海野町商店街の一員として夢を語り・恋を語り、酒を酌み交わしてきました。

しかし、まさか彼の葬儀のお手伝いをする事になろうとは、まさに痛恨の極みであります。

故人は昭和23年7月21日に生を受け、長ずるに従いその才を発揮し、学級委員長・生徒会長（上田2中）に端を発しPTA会長・同窓会副会長さらには上田青年会議所理事長とそのリーダーシップは遺憾なく発揮されました。

また一方では、クリエイティブな才能も発揮し、告別式のロビーにその一部を掲示させて頂きましたが、恒例となりましたヤジマのカレンダーの絵は彼の手によるものであります。

さらには「ミスユニバース長野大会」にてジュエリークリエイターとして14人分のジュエリーを製作しました。この模様はNBS（長野放送）にて「ミスユニバース・ジャパン長野大会 ファイナリスト12人に密着」と題して、奇しくも彼が最後の命の炎を燃やしていた12月31日に放映されたので、御覧になられた方もあるかと思えます。

この様に才気煥発なところがあるかと思えば、一昨年私が海野町の自治会長を引き受けた時、ある役職が空席になっていました。重要な役職で誰でも良いというわけにはいきません。困った私は彼に頼みました。二つ返事で了解をもらいましたし、その仕事を完璧にこなしてくれました。

彼は私の知る限り間違いなく最も優しい男の一人であります。

そんな優しい彼が最後まで心に掛けていたのは残されたご家族のことでした。お子さん達は皆さん立派に成長され、それぞれの道を堅実に歩んでいます、何分まだ若いですが。

どうか生前の故人同様ご厚情を賜りますことを切にお願いします。

本日は誠に有難うございました。

（15年1月11日、告別式での葬儀委員長挨拶から）

小山田 秀士（7組）

上田高校時代の矢島好高君はまじめな好男子というくらいであまり記憶がない。思い出はここ20年くらいの私が丸子に帰ってからの事が多い。好高君は近代上田がなぜ栄えたのかという命題で、蚕種・養蚕・生糸にたどり着き、その解明やのこっている記憶や遺産を活用することをライフワークにしていたと思う。上田の生糸が横浜開港の少し前から輸出されていたこと、ヨーロッパの生糸産業が微粒子病で壊滅状態になった時、上田の蚕種の輸出によって救われたこと、その時の蚕卵台紙が今もイタリアに残っていることなど語ってくれた。好高君はこれらのDNAを活用してこの地域の再興のヒントにならないかと夢見て、自ら動きまた影響を与えていた。老舗の時計店の三代目の好高君は宝飾にセンスがあってこれらをモチーフに活用して素晴らしい斬新な作品を作っていた。桑やその実を使った料理もアイデアを出しフランス料理に仕上げていた。銘菓がないという上田で好高君のアイデアと命名の「繭の郷」は素晴らしいものと太鼓判をおしたい。私も蚕飼姫プロジェクトを信大の援助でスタートさせたが、好高君の影響と励ましがあったおかげである。

多くのアイデアやプランを実施しようとしていた矢先の急逝でご家族は言うに及ばず地域にとっても貴重な人材を失ってしまった。残念というほかはない。好高君と一緒にイタリアを訪ねて、上田からの蚕種や生糸の足跡をたどる夢はもう永遠に実現しない。合掌

（15年1月22日）

羽田 義久(11組)

誠に早い、早過ぎる矢島好高さんの旅立ちでした。

元旦の午後に庭で雪掻きをしていた私に好高さんの長女千沙子から電話があり、泣声と嗚咽に当初は何が起きたか分かりませんでした。

彼は自宅療養や川越の病院へ行ったりしていたのですが、突然の連絡に驚きました。彼女の婚礼が昨年初夏に済んで、落ち着いた矢先に「胃がん」が見つかり、療養生活に入ったところでした。

治療を続ける中、痛みに悩まされることはほとんど無かった様でしたが、足が急にむくみ始め、食が進まなくなりました。それでもまさか年明け早々に逝くとは全く思ってもいませんでした。

私の妹ゆかりが35年前に縁あって好高さんに嫁いで、2男2女の子供達を育て上げ、ある意味これから自分達の人生だということでしたのにと考えると、私も悔しくて気の毒でなりません。

彼は上田市のことや商店街のことをいつも考え、郷土の歴史の中でもかつて栄えた養蚕と海外との関わりや先人の実績の研究や広報活動、また上田との養蚕で縁のあったイタリアの都市を描いたカレンダーを毎年作ったり、独特の感覚と行動力で多くの仲間や地域の人達に親しまれ好かれた優しい男でした。

彼は商店の経営者と言うより文化人・研究者の趣きで、私はかつて何度も彼に地域の為にもと思い、市議員やら行政的な手腕を発揮し活躍出来る場を薦めたこともありました。

彼の多くの才能や人間関係力をもっともっと生かして行って欲しかったと、実に残念でなりません。

私は今だに言葉を失っている状態でもありますが、好高さんが天国から我々仲間や残された家族、そして商店街や地域をずうっと見守って行って欲しいと改めて願っています。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(15年1月23日)



高校修学旅行で（右端が矢島君）



家族と（2014年6月13日、娘さんが嫁ぐ前日撮影）